日本セキュリティ・マネジメント学会
第37回全国大会 （京都橘大学）

2024/7/27

自然定常性の限界点越えの抑止を意識した環境対策

谷　誠
（京都大学名誉教授）

発表の概要

セキュリティは「定常性」の遮断への対策だが
資本主義経済の利潤拡大の「非定常性」の必然的結果である

世界全体では、国民国家アイデンティティに基づく競争・戦争が続いている一方
それが弱い日本では、セキュリティの弱さが目立つ
失敗責任が問われないため、将来世代の負担が増す一方なので
若い世代を中心に、個人と社会との断絶が常態となっている

これらすべての社会問題は、歴史貫通的に土台となる
「地球・生物・人間の相互作用の定常性」
に関する認識が共有されていないところが大きい

鎖国下の江戸時代には、この定常性が里山依存によって維持されざるを得ず
限界点越えの危機が、支配者・被支配者に認識共有されていた

現代の深刻な社会問題は、里山が地球規模に広がって生じている
その改善には、定常性の限界点越えの認識共有が必須だとみて、考察を加える

社会における非定常性と定常性

セキュリティと定常性

セキュリティは、仕事の定常性の遮断への防御

現状より対策を強化しても、悪意ある攻撃もさらに強大になり
イタチゴッコが止まらない

悪意ある攻撃は、サイバー空間だけではなく、
むしろ、多国籍巨大企業による農業・食料等への攻撃こそ、より深刻(1)

定常性回復と非定常発展の非対称性
本発表では、この点に注目したい

(1) 藤原辰史：戦争と農業、2017

維持回復と改良追及の非対称性

セキュリティは、仕事の定常性の遮断への防御

「矛盾の水害対策」(2023)では、公共事業において
「改良追求を控え、維持回復を優先する」ことを提案

人間の欲求は下記に区別される

生物のレジリエンス

定常性を維持し、中断を元に回復する

人間の強い自我

現状に満足せず改良を追求する非定常性

だが、国家と国民で構成される社会風土は
大陸国家と島国日本とでは違いがある

ビデオニュースドットコムでの神保哲生氏・
宮台真司氏との対談(2024/6/29)もあります
https://www.videonews.com/marugeki-talk/1212

国民国家アイデンティティにおける差異

大陸国家：他国から侵略されてきた恨みの歴史から、
国民国家のアイデンティティが強い
政権が政策選択に失敗して他国に負ければ、責任を問われる
また、他民族・移民・マイノリティーが含まれ、包摂・排除の複雑さが緊張を生み出す(1)
リベラル・ネオリベの対立、協調外交・軍事増強の対立は、このアイデンティティーの共有が前提

日本では、組織に与えられた役割をイヤでも果たす意識が共有(2)
役割を果たしてさえいれば、失敗は成り行きだから責任は問われない
島国で他国による侵略の恨み意識に乏しい
例えば
・一億玉砕の正義が敗戦時に突然消滅し、米国指導の経済発展を受容した
国民から、国内外の膨大な被害の失敗責任を追及する声が出なかった(3)
・1973年金大中が韓国政府機関に拉致されたのに、国家は原状回復を韓国に要求しなかった
・国家の政権党が日本壊滅の教義を持つ旧統一教会に癒着し、選挙協力等の援助を得てきた
・国家は沖縄における駐留米軍の婦女暴行に即時抗議せず、沖縄県への通報もしない
・国家は、大災害・国際紛争発生時の食料危機・飢餓に必要な農業政策を実行していない
・官庁は、国民の事業チェックを軽視し、文書の早期廃棄隠蔽を情報セキュリティだと錯覚

日本は、国民国家としてのアイデンティティーがきわめて弱い
セキュリティに欠けている

(1) 佐藤成基：ナショナリズムとトランスナショナリズム、2009
(2) 安富歩：生きるための経済学、2008
(3) 大澤真幸：我々の死者と未来の他者、2024

目立つコンコルドの誤謬

「敗戦時、責任を問う声が出なかった」のは、
国内・アジア諸国の甚大な被害は「やむを得ない天災だった」との独自解釈による
誰もが組織の中で与えられた責任を果たしているのだから、
失敗があっても、責任をとりようがない、と「水に流す」
（被害者にとってたまったものではない）

ここから、資本主義の属性である経済発展を建前として掲げているかぎり
事業計画が明らかに失敗だと予想できても中止できない 「コンコルドの誤謬」
が多数発生

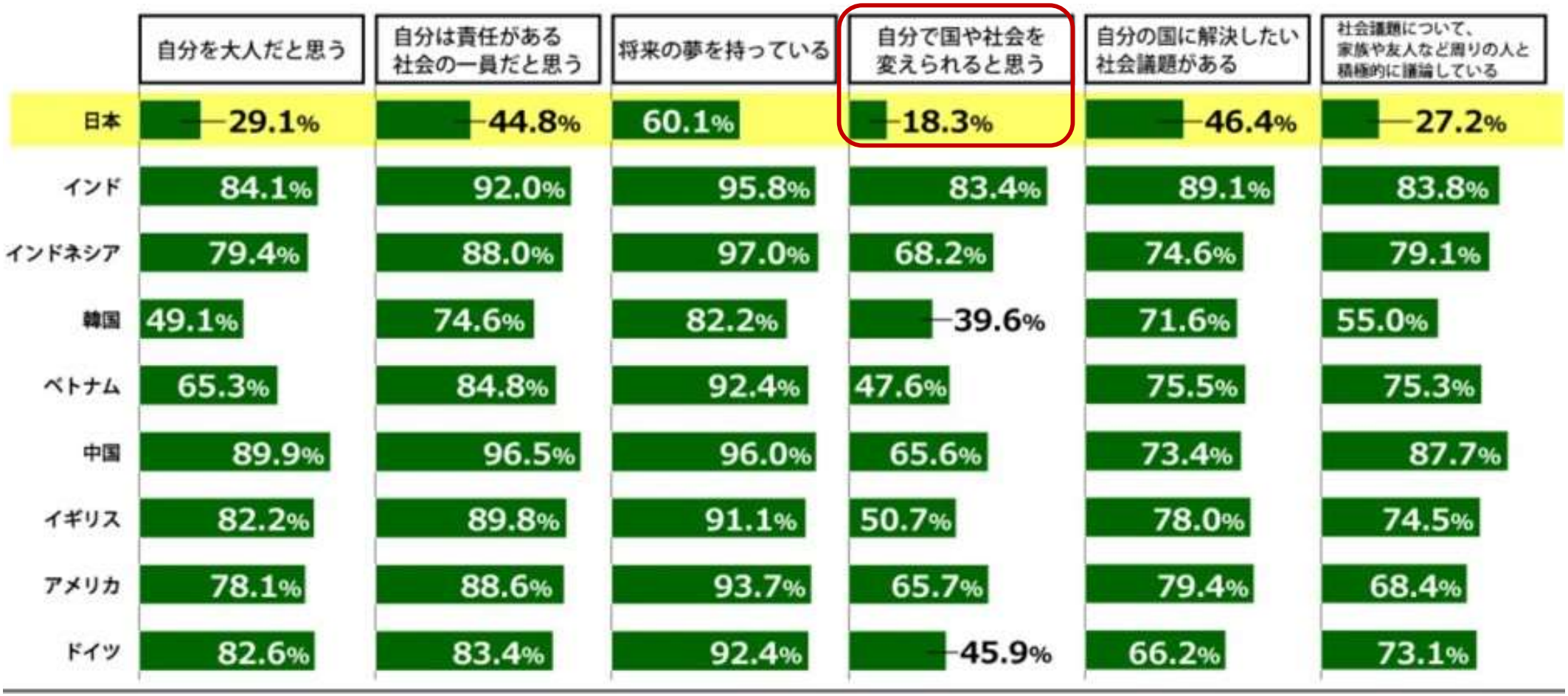
例えば
- 水資源需要が減ってゆくのに、伸びてゆくとの仮定を行ってダムや河口堰が設置される
- リニア新幹線がJR東海の優良経営を脅かすにもかかわらず、工事は中止されない
- 3.11と能登地震で、安全維持が不可能だと実証されても、原発が推進される
- 能登復興・メタン爆発等の問題があっても万博、ギャンブル依存が危惧されてもIRが推進される
- 資源枯渇・温暖化が危惧されても、化石燃料消費拡大による経済発展が基調である
- 少子化・縮小社会が避けられないのに、過密都市の再開発、過疎化農業衰退が止められない

近未来・先の世代にとって負担となることがわかっていても
慣性力によってことが進み、より有効な対策に転じることができない

日本の若い国民の叫び

将来不安に対して、国家へのフィードバックが民主主義で重要だが、
日本では、断絶によるあきらめが強く、自助による自衛しか選択し得ない

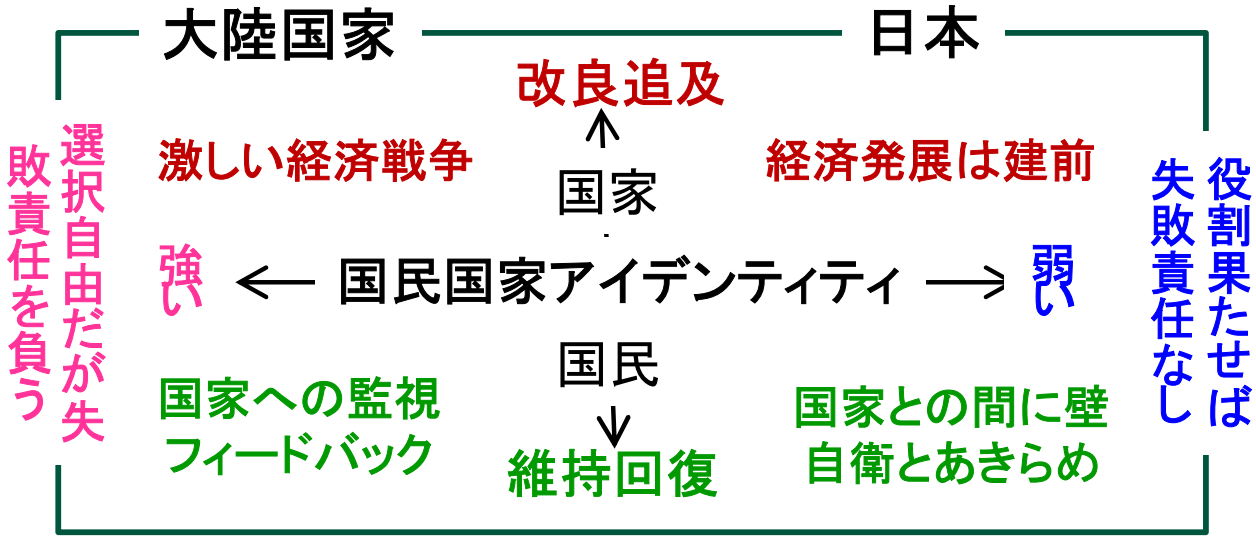
国民（特に若い世代）の意識が諸外国に比べ、社会変革に消極的で無関心
右肩下がり社会で将来が不安、役割固定化した社会を冷笑的にみる
「自分で国や社会を変えられると思わない」 石丸現象は絶望の叫びではないか？



日本財団「18歳意識調査」第20回 テーマ:「国や社会に対する意識」（9カ国調査）による
https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/pr/2019/20191130-38555.html

日本と大陸国家の違いへの複眼的な評価

大陸国家と日本の
社会風土の違い



結果的に、国民は、生物一般のレジリエンスに基づく維持回復を指向するしかない
　国民の苦しみの支援よりも、次世代負担を増やす建前の経済発展が優先されている
日本社会は、改善が非常に難しい、絶望的問題点を抱えている

とはいえ、海外に目を向けると・・・

国民国家間において、殺戮による恨みの蓄積する歴史が続いている

20世紀の欧州は戦争と革命とファシズムが錯綜して生じた大規模な流血の歴史であった(1)

日本社会をただ否定するのでなく、
それぞれの歴史風土が現在の社会を生み出したことを、複眼的に評価すべき

(1) M.マゾワー：暗黒の大陸、ヨーロッパの20世紀、中田・網谷訳、2010

地球・生物・人間の各活動と里山循環モデル

日本・大陸国家の社会風土にかかわらず、土台には、歴史貫通的に、
地球活動と人間を含む生物活動の相互作用の定常性の維持が必要

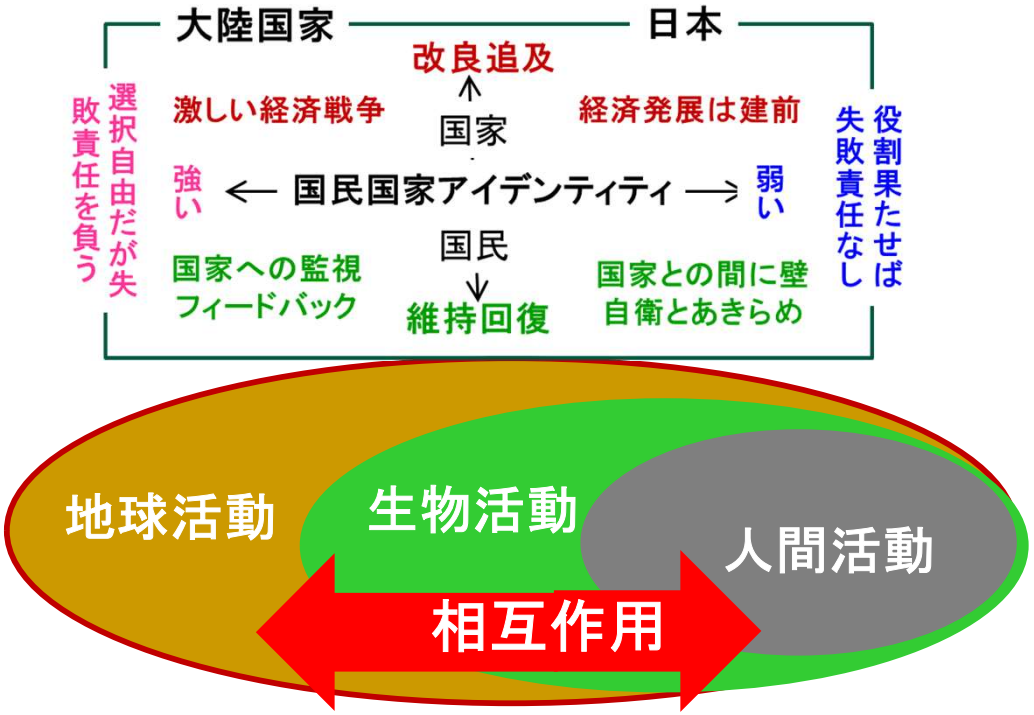
生物のそれぞれの「種」（微生物・植物・動物）は、生態系の一員として、
相互作用（外界とのやりとり）を通じて、生態系の定常性を維持している

人間個体は、言語を通じて自我を獲得したので、
改良を追求し、相互作用が非定常に変化し、限界点越えの危機が生じる

大陸国家では、周辺の侵略が限界点越え
の克服手段となって、戦争が繰り返された

江戸時代は、相互作用が里山に依存
相互作用の限界点越えの危機
が見えやすかった

この里山循環モデルを調べてみよう



歴史貫通的に社会を支える自然の相互作用

日本の社会風土のルーツとしての
里山循環モデル

鎖国下の江戸時代の経済を支える里山

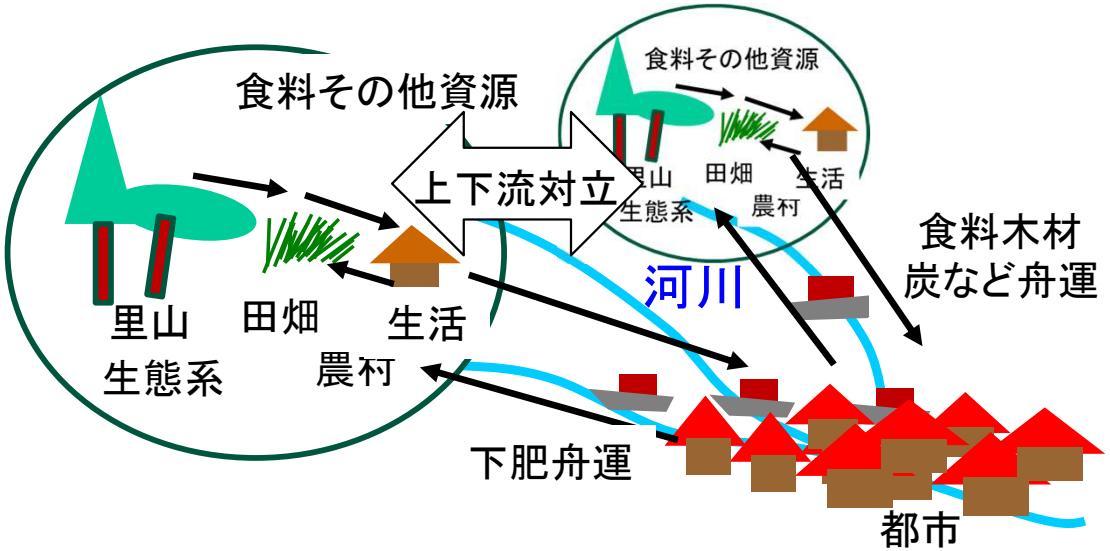
農民は、燃料・肥料を得る里山依存の物質循環の定常性に尽力
領主は、村落自治の安定に統治機構を依存

3000万人の高度な経済活動が維持されたのは、
里山における生物資源の利用が持続していたため

⇨ 里山循環モデルと呼ぶ

周辺及び川の上下流の間で、生物資源　水田用排水の利害対立が常態
加えて、上流農村と下流都市間の水害・土砂災害・舟運を巡る利害対立も多発

事例：上流が用水取り決め違反したので日照り被害が莫大になった
川の氾濫による水害は、上流で土砂ざらえしたためだ
古来草刈り権利のある里山で、隣村が草を横取りした
川の中洲が大水で移動した後、対岸が不当に萱を刈った
排水路の伏せ越し（サイホン)の修繕費用の配分が不当だ



地球・生物・人間の相互作用定常性の
維持を表現する里山循環モデルと
流域スケールでの利害調整

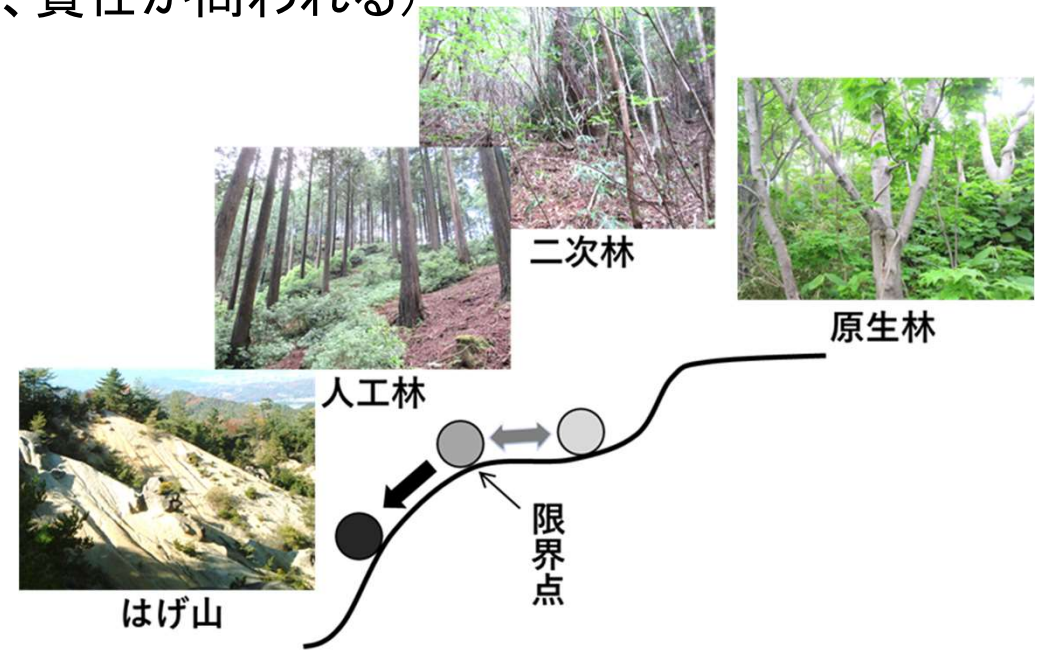
里山循環モデルにおける限界点越え

里山循環モデルは定常性維持システムのようにみえるが、
安定した暮らしを得るための改良追及の努力が常に為されていた

が、生態系利用によって里山の植生・土壌は劣化が進み、
定常性の限界点越えによって、植生も土壌も失ったはげ山が広がっていった

はげ山のような限界点越えの破綻が見えやすかったので、
自然災害（日照りや水害）は、天災でやむを得ないとの意識が共有
各人が役割を果たしている以上、責任は問えない
（勝敗が指導者の決断で決まる戦争では、責任が問われる）

利害対立があっても、
「痛み分け」的な合意形成が
可能であった



地球と生物の相互作用と生態系の限界点

資本主義導入による里山循環モデルモデルの変容

明治維新で鎖国が終わり、列強に追いつくべく、資本主義経済と
天皇制による国民国家アイデンティティが導入された
里山依存農業はそのまま残存
農村から産業労働者と兵隊を供給するかたちで経済が発展

経済発展が無限に可能かのような錯覚が生じた

地球・生物相互作用による定常性維持は
歴史貫通原理なのだが
見えやすかった限界点越えが
里山から地球全体に拡散

見田宗介の表現　「まなざしの地獄（河出）」から引用

日本の近代化の中で、〈都会〉のために、正確には都市の資本のために、安価な労働力をだまって供出しつづけてきた、『潜在的過剰人口』のプールとしての日本の村々、国内植民地としてのまずしさのうちに停滞せしめられ、しかもその共同性を風化、解体せしめられた辺境の村々の社会的風土

地球環境問題・南北問題の根本原因は
相互作用定常性越えの限界の地球規模への拡散にある

定常性の限界点越えが
共有されなくなった

1960年代の地球限界点到達

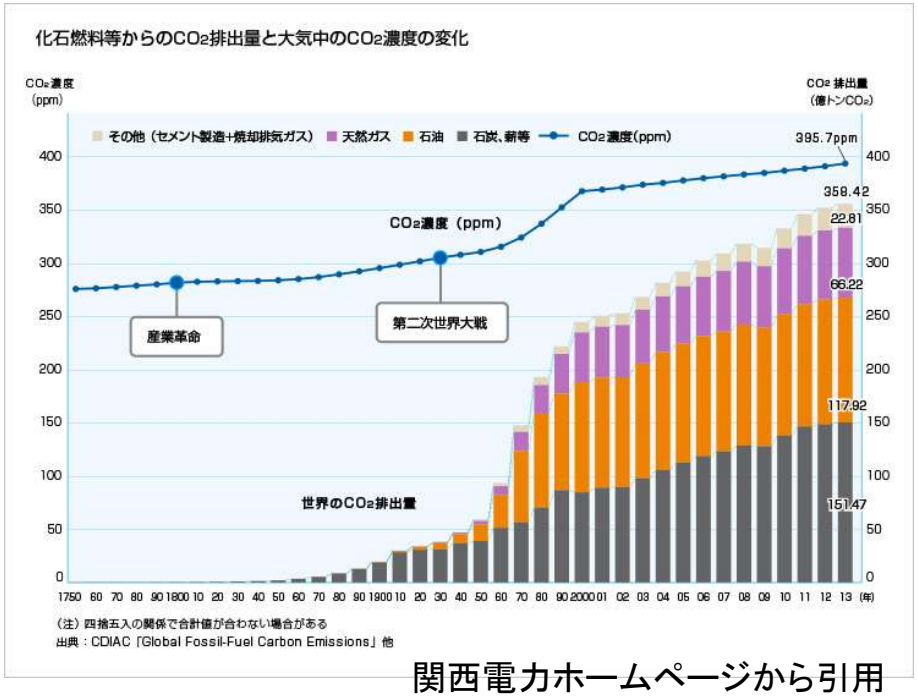
敗戦直後　食糧難が乗り切れたのは、里山循環モデルが生きていたおかげ

しかし、1960年代の燃料革命で、里山循環モデルは解体へ
村落自治による里山・用水管理が崩れて、農村の過疎化開始
化石燃料によって里山利用がなくなり、樹木成長、森林飽和へ

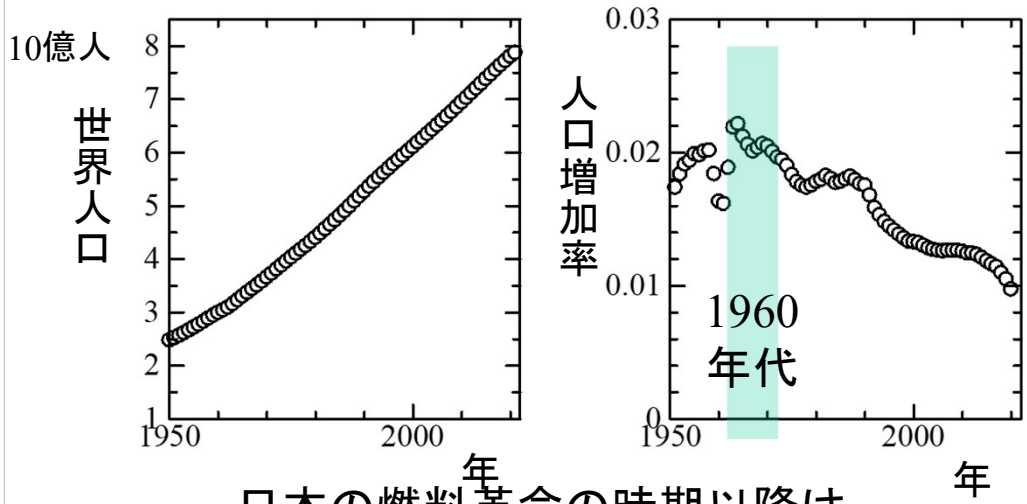
地球全体でも、60年代に化石燃料使用によるCO_2放出量が急増
人口増加率が低下を開始(1)

日本社会の諸問題は60年代から続く

1960年代は人間史の大転換点



関西電力ホームページから引用



日本の燃料革命の時期以降は
地球上の人口の伸び率は低下

国連データhttps://population.un.org/wpp/から引用

(1) 見田宗介、社会学入門、2006

環境問題のキーワードとしての限界点

限界点の認識共有の重要性

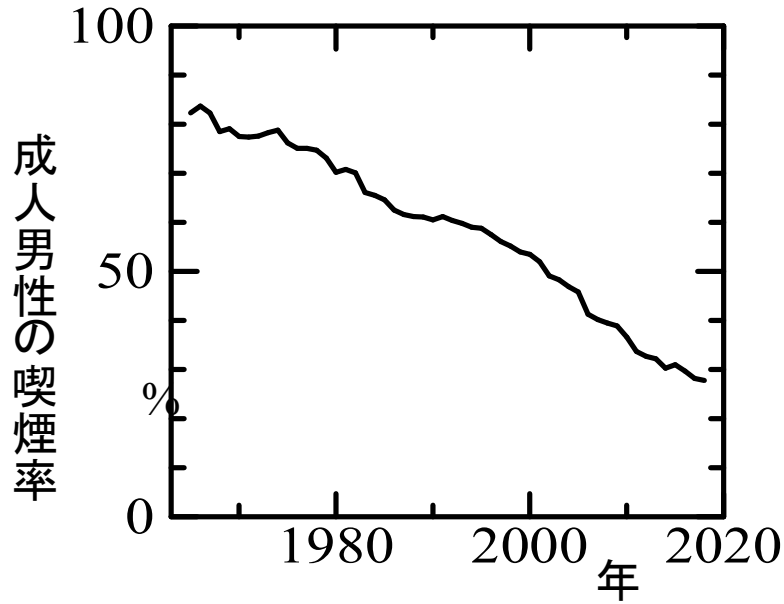
はじめに、日本社会の深刻な問題点として、次の３点を挙げた
国家アイデンティティーの弱さ、事業の失敗責任の無視、国民と社会との断絶

里山循環モデルにおける定常性の限界点越え危機の意識共有の重要性を指摘した

定常性の維持は歴史貫通的で人間活動に対して強制力を持つ

社会の深刻な問題点の改善は、自我のある個人にとっては、
限界点を意識しないかぎり、自主的には選択できにくい

現代では、自然科学（医学）の発展で、
「個体の死」の限界は共有され
限界点までの時間を延ばす選択が
自主的にさ為されてきている



50年間で成人男性の喫煙率は、80から30%に低下

公益財団法人 健康・体力づくり事業財による団
https://www.health-net.or.jp/tobacco/statistics/jt.html

社会の限界点の認識共有に向けて

だが、地球・生物・人間の相互作用の定常性維持の重要性
これが社会にとって歴史貫通的であることは、共有認識されていない

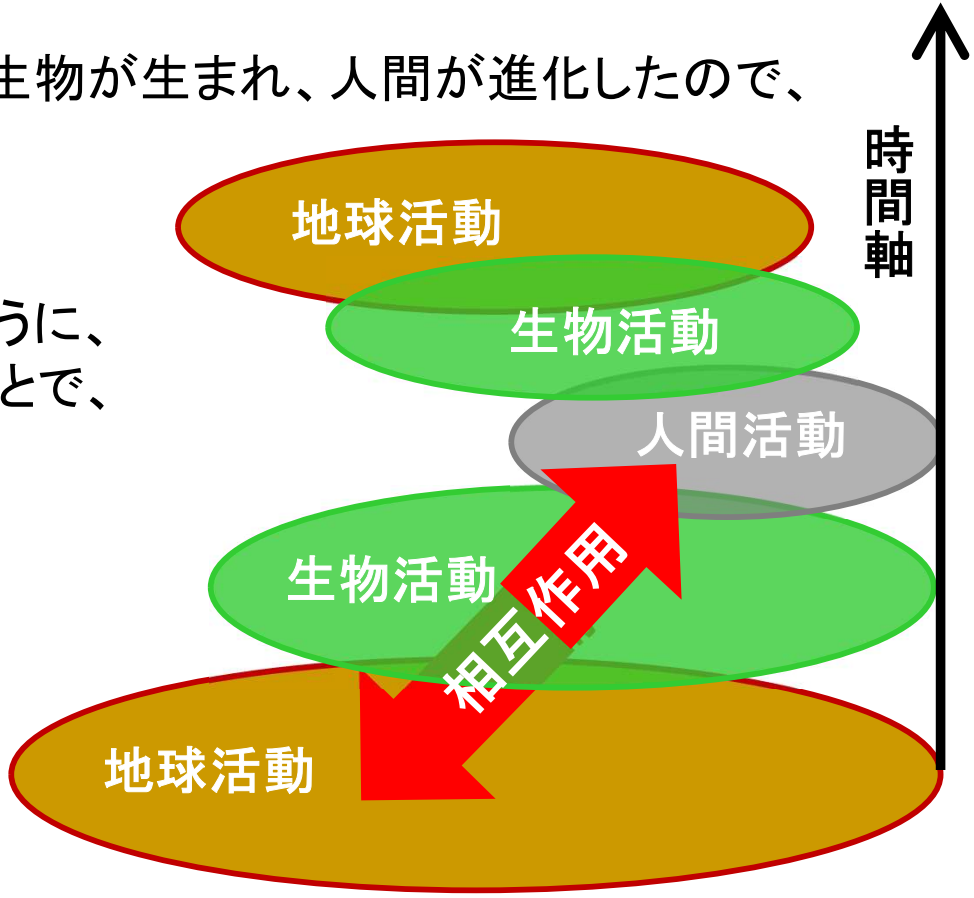
そのため、江戸時代の里山循環モデルのように「誰もが限界点越えを意識する」
ということがなく、自主的な欲求抑制が進まない

限界点の認識共有によって解決方向に進むだろう

相互作用を時間軸に沿って示すと、地球に生物が生まれ、人間が進化したので、
将来は、その逆順に消滅してゆく

個人が死の限界点を遅らせる選択をするように、
人類絶滅の限界点を自覚的に共有することで、
改良追及欲求を自主的に抑制するだろう

**里山循環モデルは、より科学的なかたちで
地球循環モデルとして、
人間社会に成立する、と予想される**



まとめ

セキュリティー強化により維持回復と悪意ある攻撃とのイタチゴッコは、
改良追及によって利潤を得ることが属性である資本主義経済において必然的

生物レジリエンス由来の維持回復に加えて、自我から生じる改良追及があるため、
定常性の限界越えがもたらされ、克服を求めて国家間の侵略戦争が繰り返された
その結果、恨みの蓄積から、大陸国家では国民国家アイデンティティーが強められた

島国日本では、鎖国下の江戸時代に、里山循環モデルの社会が成立
相互作用の限界点越えの危機を誰もが意識共有し、利害調整が図られた
同時に、最大の厄災が自然災害であったため、役割を果たせば責任が回避できた

明治期に、国家による資本主義の導入されたが、里山循環モデルは維持された
その結果、建前の経済発展重視と国民の暮らしの維持との間に断絶が生じた
国民国家アイデンティティーも導入されたが、大陸国家と違い、弱いまま推移した

1960年代の燃料革命により里山循環モデルは崩壊したが、
経済発展の慣性力に基づき、食料自給等の危機管理の弱い社会が成立している

絶望的な現代の諸問題（戦争、極端な格差、悪意のある攻撃、次世代への負担・・・）
改善を語ったとしても「絵に描いた餅」になりがち
人類絶滅の限界点を遅らせることの認識共有によって、方向性が見えてくるだろう